

〔その他〕

【随想】定年退職にあたり，徒然なるままに

徳永光俊

I 私の研究と教育をふりかえって

67歳（2020）の定年退職にあたり，私のこれまでの研究と教育をふりかえって，事実を簡単に記録しておきたいと思います。私の研究に関しては，「農業史研究つれづれ」として，一部を書きました（拙著『日本農法の心土』第3部 2019 農文協）。本号の私の学歴・職歴や研究業績が「表」の記録とすれば，ここに記すのは「裏」の記録です。どちらが表か裏かは，わかりませんが…… また，多くの方々から思い出などを寄せていただきました。ありがたいことです。これらも私が「自」意識している顔とは，また「他」の顔かもしれません。これもどちらが「自」か「他」か，わかりません。

これまでに単著を4冊書きましたが，これらがよそ行きの「研究者としての作品」とすれば，これまでの67年は私的な普段着の「人生の作品」です。どちらが素顔で，どちらが仮面か。『日本農法史研究』（1997 農文協）には，佐藤常雄氏（『日本史研究』430号 1998），飯沼二郎氏（『経済史研究』第2号 1998），宮本誠氏（『農業経済研究』第70巻2号 1998），西村卓氏（『土地制度史学』第169号 2000）が書評を寄せていただきました。近著の『日本農法の心土』の書評は，内田和義氏（『農林業問題研究』第55巻4号 2019），田中耕司氏（『農業経済研究』第92巻1号 2020），中島紀一氏（『有機農業研究』第12巻1号 2020）が書いて下さいました。ありがとうございます。書いた本人では気付かない側面を指摘し，足りない面を批判してくださり，その後の励みになっています。とりわけ田中さんには若い頃より現在まで，研究室に下駄ばきで押しかけては半熟の考えを話し，厳しいコメントを頂いてきました。終われば百万遍限界で一献。感謝に堪えません。

平凡な一農業史家の思い出，与太話です。自分に不都合なことや嫌な思い出は封印しているでしょうから，自慢話に聞こえるかもしれません。そうだとしたら，お許しください。

1 1952（誕生）～1971 [少年期・松山時代]

私は1952年12月に，愛媛県松山市唐人町で父・重孝と母・敏子の三男として生まれました。唐人町は，松山藩の時に唐人が住んでいたことから名付けられた由緒ある町名です。今は町名変更で消えてしまいました。父は高校で歴史の教員をされており，母の実家は農家でした。幼い頃には，母は農繁期には手伝いに実家へ帰っており，私も連れられていたこと，家では内職で松山名産の姫だるまを作っていたことなどを覚えています。母は戦後の

どさくさの時期に長女を3歳で肺炎のため亡くしていましたので、毎朝毎晩仏壇に陰膳を供え、「マーカーハーニャーハーラーミーター……」と般若心経を唱えていました。隣に座った私も、いつしか覚えてしまいました。母からはいつも、「みっとし、おかげさま、おたがいさまじゃけん」と教えられていました。近くの石手川の土手で三角ベースの野球をしたり、川で遊んでいました。中学・高校は、サッカー部で毎日練習に明け暮れていました。スポーツ好きはここからきています。

父は米屋・荒物屋の次男で、戦前には東京帝国大学文学部で中国史の勉強をしていました。学徒動員で戦争へ行き、その後は故郷松山に帰り、高校教員をしながら私たち家族を養ってくれました。大学進学にあたり、私はぼんやりと「どのように生きればいいか」を学問で考えてみたいと思っていましたので、哲学や歴史が好きだったこともあり、その方面へ進もうと思っていました。三男坊でしたのでとくに「家」を意識することはなく、どうせ出ていくのだから自由にやりたいという気持ちがありました。しかし、父は苦勞させたくなくなったのかもしれませんが、折しも高度経済成長期でしたので、工学部を強力で勧めました。

2 1971（上京）～1985〔青年期・京都時代①〕

結局妥協して、農業関係なら工学部とは少し違うかなと思い、1971年に京都大学農学部の農業工学科へ進学しました。しかし、やはり熱意がわかず全く勉強しないので、理系の物理学や数学の単位が全く取れませんでした。どうしようかと迷っていた時に、農学部内の農林経済学科に歴史を勉強できる「農史講座」があるのを知り、これだと思いました。親には内緒でこっそり転学科試験を受けて、無事に合格し農業史を勉強することになりました。ここで転学科していなければ、全く違った人生を歩んでいたと思います。卒業論文は故郷の「伊予緋」について書きましたが、全くもってお粗末この上ないものでした。

上京して最初のショックは、近くで家庭教師をして、「どこから来たの？」と問われて、「四国の松山です」と答えたところ、「あー、高松県ね」と言われたことでした。四国は「海外」で、4つ県があるくらいにしか見られていないんですね。そして松山弁の「ほじゃけん」とか話すので、「けんけん先生」とからかわれたり、お尻と膝につき当てのズボンを見て笑われたこともありました。最初から京都にはいい思い出がありませんでした。それが、50年も住んでしまったとは……

下宿は、京大のそばの吉田山の麓で、神楽坂に面した吉田下大路町の南端でした。弁当の仕出し屋さんでしたので配達を手伝い、アルバイト代の代わりに余った弁当をもらっていました。学生時代は超儉約をして過ごしました。ふだんの朝は、パンの耳をパン屋さんからもらってきて、卵と牛乳をかけて電熱器でフレンチトースト風に作って済ませました。昼ご飯は、学生食堂で、納豆に卵と取り放題のねぎを大量にかけて食べました。納豆は松山では全く馴染みがなかったので、最初見た時はねばねばした気持ち悪い何じゃろかと不思議でした。栄養があると聞いて、仕方なく毎日食べました。夜は、近くの王将・銀閣寺店の中華丼が定番でした。両親から現金書留で仕送りがあった日だけは、焼餃子の贅沢を

しました。1年中ほとんどこの3食でした。

当時は学園紛争の時期で、学部時代はストライキばかりでまともに勉強できなかったの
で、大学院修士課程くらい入って勉強し、その後は故郷に戻り高校の教員になろうと考
えていました。幸い合格して、1975年より農史の勉強を始めました。文献研究などはもち
ろんです。一番苦労したのは、学部時代に全く勉強していなかった古文書読みでした。日
本農業史を研究しようとすれば、古文書が読めなければ話になりません。大学院の先輩に
一から教わり、文学部国史学科の古文書合宿などにも参加させてもらい、必死で古文書と
にらめっこの日々でした。奈良県の古文書調査をして、何とか修士論文では「大和綿作」
について書きましたが、今思えばこれまたお粗末なものでした。

母校の松山東高校で社会科の教育実習をしましたが、だんだんと農業史研究の道へ進み
たいと思うようになりました。両親も仕方なく黙認してくれて、1977年に博士課程に進
学しました。「関西農業史研究会」という「在野」の研究会のお世話をし、三橋時雄京大
教授、飯沼二郎京大教授、岡光夫同志社大学教授の指導を受けるようになったのが、私の
進む道を決めたと思います。1977年6月から始まり、今もって続いており40年を越えまし
た。2020年1月までの383回の研究例会で31回報告をしました。若い頃はほぼ毎年してい
ました。業績目録の報告タイトルを見れば、私の研究の歩みが一望できます。関西農業史
研究会を抜きにして、私の研究人生はありません。そのかわり学会活動というのは、ほと
んどしませんでした。決して「反・アカデミズム」などという肩肘はったものではなく、
自然とそうになりました。大学院の農史ゼミでは、三好正喜教授の厳しい指導を受けました。
恩師の4先生の思い出は、すでに書きましたので省略します（『日本農法の心土』所収）。
当時の研究会の様子は、重久正次さんと伏見元嘉さんの文章をお読みください。

1975年の大学院入学とともに、故郷の中学・高校の同級生と結婚しました。何が何でも
就職しないといけないので、1日24時間？寝ても覚めても研究でした。おそらくこの時期
が生涯で一番研究した時期でしょう。生活費は妻がほとんど稼いでくれており、ひたすら
研究に専念していました。

江戸農書の研究は大学院時代から進めていました。『日本農書全集』第Ⅰ期全35巻
(1977~83年)では、4巻分の農書の翻刻・注記・現代語訳・解題をさせていただきました
(『日本農法の水脈』1996 農文協 参照)。勉強になりましたが、それより折しも農書
ブームで多額の印税を頂戴したことが、何よりうれしく、生活費の足しになりました。少
しだけ妻にも顔向けできました。この頃のことは、伊藤泰子さんが書かれています。

後に『日本農書全集』第Ⅱ期全37巻(1993~97)の編集を通じて、農文協編集部長の原
田津さんとお知り合いになれたのも、ありがたいことでした（『日本農法の心土』参照）。
原田さんを通じて、縁もゆかりもなかったのですが、農水省の研究機関のまとめ役であ
った西尾敏彦さんともご縁が結ばれました。東京で3人一緒によく飲み、農業研究についてしゃ
べくりました。西尾敏彦さんの文章をお読みください。

1980年3月で3年間の博士課程が終わり、その後は研修員、いわゆるオーバードクター
(OD)をしました。農史講座ではすぐに就職できることはなく、みんな5~10年くらいし

ていましたので、別に当たり前だと思っていました。関西や東京、そして遠隔地の大学へ応募を繰り返しましたが、うまくいきませんでした。大学院・OD時代には、福田定良、鶴見俊輔、吉本隆明らの本を読むようになり、「アカデミズム」から離れた「在野」というのを強く意識しました。

そんな折、農史講座に非常勤で出講されていた大阪経済大学経済学部の山田達夫教授（第10代学長 1998～2001）から、三好先生を通じて、大経大に応募してみたらとすすめて頂きました。林業史の山田先生は農史講座の大先輩にあたり、黒正巖博士の百姓一揆年表を完成させました。幸運にも就職することができました。今のような完全公募制度なら、就職出来たかどうか。33歳の時ですから、5年間、ODをしたことになります。妻と両親たちに就職を報告できた時は、正直ほっとしました。大経大に拾われなかったら、これまた別の人生を歩んでいたことでしょう。そのため大経大には強い「恩」を感じていました。何か、人生ってこうした偶然のつながりのように思います。何とかうまくいったから、今はこう思えるのかもしれませんが。お許してください。

3 1985（就職）～2005 [成年期・大経大時代①]

1985年4月、西田幾多郎の哲学を創造的に発展させた鈴木亨学長（第6代 1980～86）から、昔の本館2階の学長室で緊張しながら辞令を頂いたことを覚えています。日本経済史研究所の『経済史文献解題』の仕事はアルバイト代わりに大学院時代からしていましたので、農史初代教授の黒正巖博士（初代学長 1949）のお名前は存じ上げていました。しかし当時は、それほど強くは意識していませんでした。今思えば、ご縁です。三橋・飯沼先生は黒正博士の直弟子ですので、私は黒正博士の孫弟子にあたり、そこに就職できたのですから。以来、34年間大経大一筋で勤めたことになります。もちろん途中では他の大学に移ろうと思ったこともあります。大学が「沈没」しかけた時、そして当時は阪急電車のアクセスが悪くて通勤がしんどかったので、京都市内の大学にと思ったことも正直あります。お世話になった山田先生に予めご相談すると、「徳永君、どこ行ったって、一緒やで」と軽いなされ、おジャンとなりました。

大阪経済大学に勤めだしてからは、「日本経済史」が主担当科目でした。農業史を中心としたものでしたが、いまふり返れば、これもまたまたお粗末なものでした。そしてサンダルにGパン、Tシャツのいでたちで、全くもって生意気でした。ゼミもいい加減でした。初期のゼミ生の思い出を読んで頂ければ、わかります。申し訳ない限りです。今の教員評価制度なら、すべて失格でしょう。まあ、そんな時代だったんですね。

研究会の仲間からも、「あんたは思い込みが激しいし、人の好き嫌いがきついし、人見知りする」とか、「頭隠して尻隠さずやな」とか言われていました。きっと、自分勝手に生意気だったんでしょうね。とんがって、焦っていたのかも。ご迷惑をかけ、すいません。

勤めだしてからしばらくして、今度は吉田山の麓で近衛坂(?)の吉田下大路町の北端に銀行から借金して、京都でよくある「鰻の寝床」を建てました。やはり、吉田山、真如堂、黒谷さんなど散歩できるところが好きだったんでしょう。そして現在まで住み続けて

半世紀になりましたので、京都が「第2の故郷」と言っているかもしれません。住んで暮らしてみても、私のような「入り人」の「田舎人間」には、「いけず」な町ですが。

私は古文書を読んで、研究するというスタイルを守り続けてきました。ある時ふと、私の文書中心の研究は農業を振興するうえで役に立っているのだろうか、と思い始めました。それまで無我夢中で研究してきましたが、若い頃の「私はどう生きるのか」という問いが頭をもたげてきたのです。何のために研究しているのか。「現場」を歩いてみよう、急に思い立ち、研究会の仲間である重久正次さんをお願いして、フィールドワークを始めました。1990年頃のことです。そのいきさつは、重久さんの文章をお読みください。

それから古文書調査をしていた奈良の農家を訪ね歩くことも始めました。奈良女子大学附属中高の鈴木良先生に、佐保川筋を歩いていた時「徳永君、研究楽しいかい」、と問われました。「いえ、苦しいです」と正直に答えると、鈴木先生は「自分が楽しなかったら、他人が読んでもおもしろくないよ」、と言われ、はっとしました。大和郡山市のトマト農家である堀内金義さんには随分とお世話になりました（『日本農法の心土』参照）。農家の皆さんと1993～2011年まで18年間毎月1回の「やまと農談会」など、奈良でいくつかの勉強会をしました。宮本敬子さんの文章をお読みください。

東北農村を歩きだしたのは、山形県村山市のスイカ農家である門脇栄悦さんのおかげです。1998年から夏や冬の農閑期に、門脇さんの車で1週間くらい民間の天気予測をしている人や、農業名人たちを回りました。数年たってから、「先生、やっと顔つきが丸くなってきたね。これまでは裨着てるようで、固かったよ。そんなんでは、農家は本当のこと言うてくれんよ」、と言われました。やはり自分の中に「大学教員」という偉ぶった意識があったのでしょうか（『日本農法の天道』2000 農文協 参照）。今もなお、ご一緒して勉強させてもらっています。こうして多くの「恩師」に出会えたことは、幸せでした。

さらにはいろいろな方々にお世話になって、東南アジア、中国・韓国、ヨーロッパ、アメリカなどの農村をぶらぶら歩きました。上っ面を撫でただけですが、百聞は一見に如かずで、比較農法を考えるうえでとても参考になっています。東南アジアでは、インドネシア、タイ、バングラデシュ、パキスタン、ミャンマーと旅しました。京大東南アジア研究所の「相棒」がすごくて、ほとんどドミトリーの安宿に連泊でした。全く想像外の農村ですので、極度に緊張しています。正直神経がまいっていきます。病気になって相棒に迷惑を掛けたいけないので、「ごめん3、4日に1回はシティホテルに泊まって！！しかもバスタブのある部屋でシングルで！！」、とお願いしました。シャワーだけでは疲れが取れません。あちらでは部屋ごとの宿代ですので、二人で泊まると半額になるのです。これまたいい経験でした。

京大大学院の農史講座では、課程博士を取る伝統はなく、すべて論文博士でした。三好先生が1990年3月に退職されるということで、まわりから博士号を取るよう勧められました。あまり乗り気ではなかったのですが、この機会を逃したらもう取らないだろうと思い、頑張りました。これも偶然です。こうした指導教員の退職前に取った学位は、どさくさまぎれの「ポツダム学位」と揶揄されていました。「農業技術の社会文化史一大和農

法の構造と展開―」。正直、頑張りました。お粗末ではなく、これだけは今でも自信があります。何とか研究者として独り立ちできたかなという感じで、やっと落ち着きました。

すぐに出版しようと京都のある出版社に持ちかけ、出す約束をしてくれました。でもいつまでたっても出ません。1年、2年、3年、半年に一度くらい催促しますが、煮え切りません。原稿を返してくれと言えば、間もなく出しますからとお茶を濁します。5年ほどして「喧嘩」してやっと返却してもらいました。しかし、何となく出版する気がなくなり、それよりも戦後の続きを書いて完璧を期そうと思いいおしていました。これは2019年に「大和農法の伝統と変容―奈良盆地中央部の戦前から戦後にかけて―」（『大阪経大論集』第70巻3号）で、やっと書き上げました。

しかし当時はなかなか進まず、飯沼先生からきついお叱りを受けて、1997年に農文協から『日本農法史研究』で、日本経済史研究所の研究叢書として刊行出来ました。ありがたいことでした。中扉の書名と著者名は、父に毛筆で書いてもらいました。かつては中国史の研究者を目指しながら学徒動員のために断念していただけない、心の中うれしかったらうと思います。少し親孝行できました。『日本農法史研究』は長年品切れですので、先の論文と合わせて増補版を出したいと思っています。

一区切りついたので、教授への昇進願を出して1997年に無事になりました。そして、1999年度より日本経済史研究所の所長を3期6年間しました。当時の研究所は、『経済史文献解題』（紙判）の仕事がほとんどで、他には特に目立った活動をしていませんでした。研究所を学内外で認知してもらうために、山田達夫学長の下で、創立70周年の記念論文集『経済史再考』や『黒正巖著作集』全7巻、黒正巖博士に関する研究書などを刊行しました。そして『経済史研究』の復刊、経済史研究会や黒正塾、寺子屋などの開催、そして『経済史文献解題』のデータベース化などに着手しました。寺子屋の様子は、伏見さんの文章をお読みください。秀村選三九州大学名誉教授、作道洋太郎大阪大学名誉教授などの「宮本又次エコール」の先生方にご協力をあおぎ、さらに次の世代へのバトンタッチを図りました。この頃より、黒正巖博士の「道理貫天地」・「研学修道」などの「黒正イズム」の再興を意識するようになりました。

4 2005（役職）～2019 [壮年期・大経大時代②]

2005・6年度には学生委員長、2007・8年度には経済学部長、2009・10年度（10月まで）は教務委員長を務めました。そして2010年11月より学長を3期8年半、やりました。とくに望んだことでもなく、ポストやカネが欲しかったわけでもありませんが、そのような状況になれば引き受けるのが教員の仕事だと割り切っていました。これも偶然、巡りあわせのようなものです。15年間、学内役職をやり続けたことになります。今ふり返れば、長かったです、その時その時には全力でやりましたので、とくに後悔はありません。これもひとえに教職員の皆さまのご支援、ご協力のおかげと感謝しています。「雑務」で研究ができないと愚痴る方もいますが、学生教育が私の「現場」だと思いやってきました。

学長になってからは、「そっと手を添え、じっと待つ」を言い続けてきました。農業で

も教育でも、生きものを育てるコツは一緒やと思ってやりました。ソビエト社会主義研究で新潮流を開拓した上島武先生（第8代学長 1992～95）に、お酒を飲みながら例の口調で、「おぬしの生き方は、ナロードニキヤな」と言われたのが印象に残っています。それぞれの仕事には思い出が一杯ありますが、今はまだ差し障りも多数あります。また後日機会があれば、記憶が薄れないうちに記録として残しておきたいと思います。

学長時代には「野風草のふうそうだより」という学長ブログを904回書きました。平均すれば1か月に9回、3日に1回のペースとなります。80万回ほどのアクセスがあり、大学内外に情報を発信できました。こうした文章を書くのは、好きなんですね。中学から今まで日記を書き続けてきた延長です。スケジュール帳なども残しています。まあ、農業史家として自分の歴史を記録するような感覚です。

ゼミもありがたいことに毎年15～30人くらいの応募があり、1987～2019年度までで31期650人ほどの卒業生がいます。住所を把握できている方が約3分の2、年賀状の交換ができていない方が約4分の1います。若い人たちはもう年賀状ではなくなりました。メールで「新年おめでとう」でしょう。20年、30年たってもご縁が続いているのは、うれしいことです。「野のようにたくましく、風のようにさわやかに、草のようにいきいきと」の思いで、ゼミ教育をしてきました。「野風草」です。あんましうまくいったとは思いませんが、ゼミ生たちの思い出をお読みください。私の力不足で、満足したゼミ生活を送れなかった人も大勢いると思います。ごめんなさい。

学生たちのスポーツクラブの応援、芸術系クラブのコンサートやイベントにも、いつでもどこへでも出かけました。竹澤健介さんの文章をお読みください。

気分転換で美術の展覧会によく出かけました。自宅近くに京都市美術館や国立近代美術館がありましたし、美術はもともと好きでした。妻が絵の勉強をしていた影響もあります。京都の日本画家や奥村土牛、堀文子、奄美の田中一村、染色の三浦景生などがお気に入りです。高谷光雄さんと倉貫徹さんのメッセージをお読みください。音楽ではCDを聞いたたり、コンサートやライブでジャズ・クラシック・邦楽・Jポップなど、気に入ったら何でもとにかく「生」を聞きに行きました。南座の顔見世、歌舞伎、文楽、能・狂言、現代演劇なども、のめりこむまではいきませんが、一応覗きました。

小説はたくさん読みました。中学・高校の頃は文学少年でした。名作と言われるのは読みましたが、とくに山本周五郎を本屋さんで全巻立ち読みし、涙したことを覚えています。大学に入ってから、何故かほとんど読まなくなりました。20年弱の空白を経て小説にはまるきっかけは、創立70周年記念講演会で、2003年11月に山田洋次監督の映画「たそがれ清兵衛」（原作：藤沢周平）を観て感激し、山田監督の講演を聞いたからです。

それからまずは藤沢周平、そして宮城谷昌光、山田風太郎、池波正太郎、葉室麟、飯嶋和一、乙川優三郎などの時代小説を次々と読んでいきました。女性作家では朝井まかて、木内昇、梨木香歩、上橋菜穂子などなど。司馬遼太郎は、故郷の正岡子規や秋山兄弟を描いた『坂の上の雲』は読みましたが、あとは何やらお説教臭くて読めませんでした。そして人から面白いと勧められたら、何でもかんでも一度は読み、はまればその作家の作品を

全部読んでいきました。

農業史以外の研究会にも出かけました。1993年からの安藤昌益の読書会、2010年から「いのち」をめぐる東洋医学の勉強会、さらには2019年からの「宗教と科学の対話研究会」などです。耳学問をし、いろいろな分野の方々と知り合うことができました。棚次正次さんの文章を読んでください。農家からの聞き取り、民間の天気予測をフィールドワークした頃から感じていたことですが、耳学問をするに従い、「科学」に収まらない「科学」の枠外にもっと大切な何かがあると感じるようになりました。これは若い頃から悩んできた「どのように生きるのか」と関わりがあります。社会経済的な方面よりは、こうした個人的な内面の問題への関心が大きく、それは研究内容にも反映しています。

私は研究のポイントとして、「オリジナル・ロジカル・リアル・アイデアル・つながる」とか、黒正イズムの4つの眼として、「鳥の眼・虫の眼・魚の眼・心の眼」を言ってきました。しかし、生き方に対する答えとして今一番腑に落ちているのは、「おかげさま・おたがいさま」です。何だ、これって若い頃から母に言われていた言葉なのです。私は、日常語・日本語・日本文化に根差した学問を作っていくことが、若い頃からの悩み・問いかけに答えることではないかと思うようになっていきます。「科学」のジャーゴン（専門用語・隠語）でごまかさないようにしたいと思ってきました。

母は2014年3月に満89歳で、父は同年5月に満94歳で亡くなりました。松山の実家を継いで、両親と同居し最後を看取ってくれた長兄夫婦には、本当に感謝しています。私がどれだけ親孝行できたかは、自信がありません。父からは学問好きの面を、母からは信心深い面を受け継いだように思います。神棚に二人の写真を飾って（妻の両親のもの）、朝晩お祈りをしています。二人ともそれなりに長寿でしたので、私も80歳くらいまではいけるかなと、ぼんやり夢見ています。2020年2月の人間ドック・脳ドックでもとくに異常はありませんでしたので。2016年から老眼鏡をかけ始めました。

そうそう、一つ思い出しました。学内検診を初めて受けた35歳の時、バリウムを飲んで写真を撮ったら、胃に大きな影があると診断されました。ショック!!!家族には内緒にして、1週間くらい悶々と悩んだ末、かかりつけの近くの医院で胃カメラ検査をしました。「あー、これは胃潰瘍の治癒あとですね」とお気楽に言われて、完全脱力しました。一安心して、早速妻には結果を報告しました。

学長をしながらで正直しんどかったですが、学長退任時の2019年3月に何とか『日本農法の心土』を上梓できました。100点満点とは到底言えず、ぎりぎり60点くらいかな。出版から1年がたって、またまたお粗末やなという気持ちが芽生えています。この「お粗末」という感覚が今でもないのは、博論の14~20世紀の大和農法を史料的に実証した『日本農法史研究』だけです。卒論、修論、「日本農法」3部作、みんな「お粗末」でした。それでも一区切りをつけて、次の段階へと進むことができ、出しておいて後悔はありません。妻へのお礼も、4冊目の単著にして初めて書きました。

私はお酒を飲むことが大好きですが（父も）、学長就任前は大学の同僚や研究仲間と飲むことがほとんどでした。京都河原町に帰ってから、一人でゆっくり酒を味わうようになっ

たのは、学長になってからです。2001年から10年までの年間平均禁酒日は135日、就任3年後の2013年から18年は平均74日（2011、12年は記録なし）。半減です。やはりストレスが相当たまってたんでしょね……若い頃から酒では数限りない失敗を繰り返してきました。急性アル中になったこともあります。その度に、妻には心配をかけてきました。

2019年3月18日に教職員の皆さまが、学長退任のお祝いをしてくださいました。本当にありがたいことでした。そこで、崎田洋一常務理事からとんでもないサプライズが用意されていました。び、び、びっくりしました。妻からのメッセージなんです。最後は、こんな結びでした。「ひとつだけお願いしたいことがあります。お酒は……もう既に一生分以上飲んだと思いますので、どうぞ、そこそこに」。あちゃまあ……

5 2019（退任・退職）～2032〔熟年期・京都時代②〕

2019年3月に学長を退任し、2020年3月に定年退職をして、こうしてゆっくりとした時間が持てるようになりました。これまでの生涯をふり返れば、私の生き方は「保守的」です。故郷松山から上京して京都の吉田界限にずっと住み続けて50年。研究も「農法」だけを軸にし、農法論で農業思想家の守田志郎にこだわり続けて45年。関西農業史研究会のお世話をして43年。大経大一筋に勤めて34年。何より妻とは結婚して45年、知り合ってから55年もたっています。あんまし変化を求めず、じっくりと温めながら生きるのが、性に合っているようです。劇的なドラマとか、大冒険みたいなのはありません。平々凡々に迷い道を歩き続けた感じです。何故「どのように生きるか」を問い続けてきたのか。何故「農」にこだわり続けてきたのか。表裏一体の問題かもしれません。これは私にとって大きな問題です。今後考えて、次の機会に書いてみたいと思います。

私がこれまでずっと考えて生きてきたことは、「まわし・ならし・合わせ」、「そっと手を添え、じっと待つ」、「おかげさま・おたがいさま」、これだけの和語で尽きると思います。長年温め発酵させて、熟成させてきたものです。専門の科学用語・概念語や輸入・翻訳学問、大げさな大状況論や政策提言、プロパガンダ風言動は、性に合いません。腐敗しないように気を付けながら、今後とも長期熟成を図りたいと思います。中国農業史の渡部武さんから『日本農法の心土』の感想として、1か月もかけて熟読して下さったうえ、「歩いては考え、考えては確かめ、確かめては問題提起され、周囲の人々をたちまち融和に導く」とありました。私が歩んできた道のり、歩き方を評価して下さり、大変ありがたく勇気づけられました。

「淡交」、淡い交わりを意識してきました。誰でも来る者は拒まず、去る者は追わず、合わなければしょうがない。誰かと特に親しくする、徒党を組むというのは、遠慮してきました。群れず、寄りかからず。日本画家の堀文子や詩人の茨木のり子の言葉です。所詮は一人との思いが強く、「自由と融和」の個人が基本です。学長時代はとにかく恬淡、春風駉蕩、明朗快活に努めました。トップが下を向いては話になりません。ただし、「学生ファースト」で逃げない、ぶれない、ウソつかない、グチらないよう、自覚していました。母からは、「ウソツキはドロボーの始まり」、とよく聞かされていました。

制度や組織というのも、実はほとんど信用していません。アナーキーだと思います。ですので、共同研究もしませんでした。長年続けてきた関西農業史研究会は、農業史好きの同好の「同志」が集まったサークルのようなもので、たとえ京大教授でも権威・権力を振りかざすということは全くありませんでした。温かい議論は好きですが、相手をやり込めるための論争とか批判というのは好きではありません。勝手にやっつけばです。学界の流行や世間の動向にも、傍目で見るとしておき、自分の好きな研究のみをしてきました。決して「反」とかという大それたことではなく、せいぜい「非」です。

趣味らしい趣味もないのですが、「本」は好きでした。「読む」というより「集める」かな。気に入った著者がいると、初期の著作から晩年まですべて揃えたくなるんですね。これまで研究室は、昔の本館3階から昔のA館2階、そして今のG館7階、最後にJ館6階へと移り、2020年3月に自宅へ完全撤去しました。都合4回、引っ越しのたびに本を売りました。いつも書岩・梁山泊さんでしたが、売値はどんどん下がり、最後はほとんど二束三文となりました。デジタル化などで紙の本は不要となってきているのですね。

今もって大事に所蔵しているのは、思想家・随筆家の串田孫一くらいです。初期から遺作まで300冊くらいはあります。何かしら波長が合って、時たま引っぱり出しては息抜きします。串田さんは戦時中の1945年に一時山形県の新庄に疎開していましたので（『荒小屋記』1970 東京美術）、2000年に門脇さんとうなっているか調査して写真や聞き取りの結果を串田さんにご報告しました。するとお手紙を頂き、サイン入りの『風に撒く歌』（1999 木犀堂）まで頂戴しました。宝物です。あつかましいですね。

若い頃は調査などで全国の農村を回る際に、各地の普段使いの陶磁器を買って、家で使っていました。3人の子供たちがいて、だいぶ割れてしまいました。やがて妻から収納しきれないのでもう止めてと言われ、伝統織物のネクタイに転向しました。学長に就任するまでネクタイをする習慣がなく、ほとんど持っていませんでしたので、仕事で各地に出かける度に買い求めました。今や100本ほどになりました。これらは故郷松山の砥部焼と伊予絣が、原風景として遠い思い出にあるからかも知れません。

それでも何が一番好きかと問われれば、やはり「研究」です。若い頃からの「どう生きるのか」を、農法の研究をしながら問い続け、毎日を生きてきたと思います。好きな研究がここまで続けられたのは、大阪経済大学に34年間勤められたおかげです。教職員や学生（保護者）の皆さんには感謝するばかりです。そしてご指導、お付き合いしていただいた皆さまにも、感謝いたします。何より家族にも。妻は故郷松山の文藝である俳句にいそしんでいます。

本来なら定年退職で「一丁上がり」のはずですが、これまで「お粗末」な作品しか書けず、内心忸怩たるものがあります。私の人生という作品もまた、「お粗末」感がぬぐえません。「おそ松くん」って漫画が小さい頃にあったな（赤塚不二夫 1962～）。残り一応80歳まで勝手に「熟年期」と名付け、これから研究に日々精進しようと思います。

私の好きな日本画家で101歳7か月まで絵を描き続けた奥村土牛画伯は、「芸術に完成はあり得ない。要はどこまで大きく未完成で終わるかである」、と言われていています（『牛のあ

ゆみ』141頁, 1974 日本経済新聞社)。奥村画伯には及びもつきませんが、学問もまた同じく「いかに大きく未完成で終わるか」でしょうから。

最近、安富歩の『超訳 論語』(2012 ディスカヴァー・トゥエンティワン)を読みました。冒頭の学而第1(1)の「子曰、學而時習之、不亦説乎」の安富訳は、「何かを学ぶことは、危険な行為だ。なぜならそれは、自分の感覚を売り渡すことになるから。しかし、学んだことを自分のものにするために努力を重ねていけば、あるとき、ふと本当の意味での理解が起きて、自分自身のものになる。学んだことを自分自身のものとして、感覚を取り戻す。それが『習う』ということだ。それはまさに悦びではないか」、である。

今までとは全く違う解釈に、ガツンと一発やられました。ここに論語の思想の全ての基礎が込められており、「学習」という概念を人間社会の秩序の基礎とする思想である、と述べられています。学習の回路を閉ざせば、「魂の植民地化」から脱け出せません。むべなるかな。小学でなく、「大学」とはこのようなものでしょう。そして高等教育機関としての大学は、小学ではなく「大学」を教えるべきところです。その基盤には、生きものすべてに、さらには天地の万物に共通する「自発＝自然」があるというのが、最近の私の考えです。本号の私の論文「生きもの循環論」をお読みください。

最後に、6 2032(退学)～? [老年期・京都時代③]を考えていますが、一応80歳で学問からは退場するつもりです。おそらくもう頭が回らんってるでしょうから……80歳からは「おまけの人生」です。2032年の本学創立100周年に生きていれば、ありがたや!

II いろいろな方々とのお出会い・ご縁

『日本農書全集』というご縁

伊藤 泰子

昭和52年ごろ、私は農文協でアルバイトを始めました。夫の大学時代に同じ剣道部にいらした中田謹介先輩の紹介でした。校正・割り付けなど製作部門を経て編集部の仕事を手伝うようになり、原稿整理という作業も教えてもらいました。最初原稿整理が『日本農書全集』第10巻「清良記一親民鑑月集」(1980)で、その解題者が徳永光俊さんだったのです。この原文には農業の例え話に将棋が出てきたので印象に残っています。その頃の徳永さんは京都大学大学院の院生。ふーん、まだお若いんだ。そんな風に思っておりました。

昭和54年秋には農書全集を囲んで「農書を読む会」というサークルが出来ました。大学の教授や研究者の方々のみならず、農家やふつうの主婦なども興味があればどうぞ、という団体だったので、私もあつかましく入れていただきました。第1回の集会は金沢で行なわれ、古島敏雄先生を会長にお迎えして和気あいあいでした。それからは毎年、農書の生まれた土地の視察研究会とでもいいますか、一泊二日の見学旅行がありました。読む会のお蔭で長崎県の対馬や沖縄にも出かけました。昭和58年の「会津農書」のふるさとを訪ねる旅では、徳永さんは奥さんとお子さん連れで参加されていました。子育てをしなが

ら研究会にも積極的に参加する若い研究者って「たいへん」なんだなあと思いました。栃木県宇都宮で「農業自得」の集会のあと、民芸といわれる陶磁器の生産地・益子に寄った時、ある作品の前を行ったり来たりしている徳永さんを見かけました。「これ欲しいけど、僕の小遣いじゃ無理か」と呟いてました。陶磁器にも強い関心をお持ちだったのですね。

この間に、編集委員・山田龍雄、飯沼二郎、岡光夫、守田志郎という先生方で着々と発行されていた第Ⅰ期の『日本農書全集』は昭和58年に35冊の完成を見ました。「農書を読む会」の活動も10年を機に終わって淋しく思っていたら、関西農業史研究会に引き継がれ、関東地方のメンバー有志は「近畿農書を読む会」の見学旅行に参加するようになりました。

やがて平成5年、『日本農書全集』第Ⅱ期・37冊が刊行され始めました。この時の編集委員には第Ⅰ期で個々の原本の解題で活躍されていた佐藤常雄、徳永光俊、江藤彰彦の3氏が就かれたのです。第Ⅱ期ではテーマ別の編成で15の括りがもうけられ、それぞれに総合解題がつきました。徳永さんが担当の「学者の農書」には青木昆陽、平賀源内なども登場しました。「絵農書」はカラーで、農業の範疇を超えた美しさを持っています。

最後に「別巻」として収録農書一覧・索引を作りましたが、これが大仕事。原文からどういう言葉を拾うか、どのように分類するか、編集委員の先生たちと編集部の方の何度も打ち合わせをされたようです。私は主に索引語拾いを受けもち、朝から晩まで合計72冊の重い本をめくりました。江戸時代の原文から拾う索引語の中には「乞食、物もらひ」などもあり、貧しい人々の生きる姿です。これらの索引語は<M8 諸稼ぎ・職業>という項目に分類されています。大判で938ページという索引巻は平成13年に完成しました。

一方で徳永さんは日本の独自の農法から説き起こして「農法論」を展開しておられ、日本のみならずアジアにも眼を向けておられます。そのころ、「高橋昇『朝鮮半島の農法と農民』飯沼二郎・高橋甲四郎・宮嶋博史編」という記録集が未来社から出版されました。高橋昇は東大農学部を出て大正8年に朝鮮総督府農事試験場に就職した農学者です。モットーは「日本の農業を教え込むより朝鮮在来の農業を詳しく調べてその改良を図る」ことにあったようで、現地の農家を訪れては時間をかけて調査を行ない、膨大な記録と写真を残しました。終戦前にその記録の大半を預かって日本に持ち帰ったのが、高橋場長の下で働いていた私の伯父、森（落合）秀男でした。徳永さんは韓国・済州島の高光敏さんと共に高橋の調査旅行の足跡をたどり、『写真でみる朝鮮半島の農民と農法』（2002）を未来社から出版したのです。そして、高橋昇を中心とした農学者たちを「朝鮮農試グループ」と名付けたのも徳永さんです。私の伯母落合亮（あき）もインタビューを受けました。

そのようなわけで、徳永さんとはとても長いお付き合い……。学長を辞められて少し暇になったのか、昨年は町田市でメゾソプラノの保多由子さんのリサイタルをご一緒しましたね。あらまあ、音楽もお好きだったとは。昨年の近畿農書を読む会での土佐和紙を訪ねる旅の帰り、高知竜馬空港ロビーで偶然お会いしました。「これから少し遊びたいけど、まだやることがあるなあ」と、遠くを眺めておいででした。かつての青年時代のように。

（元農文協嘱託・主婦）

私の徳永光俊論

西尾敏彦

〈嫌い/好き〉からはじまったお付き合い

もう20年以上昔になるが、『昭和農業技術発達史』全7巻（1995 農文協）の編集に立ち会ったことがある。徳永光俊先生と知り合いになったのはその第1巻で、彼が書いた10頁ほどの論考「明治前期の農法のうねり」の初校ゲラを読んだ時からである。こともあろうに、そのゲラに私がクレームをつけたのだ。わが国の農業技術は明治以降、何度かの大きなくうねり〉を経験して今日まで発達してきた。徳永さんはその発端となった最初のくうねり〉を、外来農法の導入がはじまった明治14年と23年の2つの農談会の老農たちの発言に求めて、読み解いている。詳細は同書を読んでいただくとして……

言っておくが、私がクレームをつけたのは、この論旨についてではない。〈嫌い/好き〉〈まわし/返し〉など、彼が多用するキーワード「野良着の和語」（『日本農法史研究』）についてである。畦道目線の農法史をめざす彼の姿勢はよくわかるが、はじめて徳永論考に接する、とくに理科系の読者に、それが理解できるかどうか。少なくとも、当時まだ徳永さんの論考をあまり読んでいなかった私には唐突に思えた。

徳永さんは一部を手直しして下さったが（?）、不満だったのだろう。まもなく農文協の今は亡き原田津さんが、彼を連れて現れた。原田さんは私が尊敬する編集者で、この叢書の編集でも随分お世話になった。徳永さんの研究にも早くから興味をもち、『日本農法史研究』などの出版を支援されたと聞く。

ここから3人の間で、どんな会話が交わされたかは記憶にない。あるのは帰途の飲み屋で、嵐嘉一・渡部忠世・守田志郎などの先生方の話が出て、座が盛りあがったことだけである。いずれもフィールドを大切にされた先生方で、その研究姿勢への憧憬が3人をより結びつけたのだろう。以後、徳永さんとのメール交換、上京の機会を捉えての「イッパイの会」がスタートした。

以上でこの話は終わりの筈だったが、じつは後日談がついてきた。最近の徳永さんの著書『日本農法の心土』によると、私がケチをつけた「野良着和語」の仕掛け人は原田さんであったとか。なんと、原田さんもお人が悪い！

「立地生態均衡系」と「^{ちがた}地方学」

〈嫌い/好き〉〈まわし/返し〉ほどではないが、徳永さんが好んで使うもうひとつのキーワードに「立地生態均衡系」がある。こちらはれっきとした農学用語で、『近世稲作技術史』（1977 農文協）の著者で、私も尊敬する嵐嘉一さんの造語である。

ある時代ある地域の農業の発達は、そこで起きた特定技術の単線的な変化によるのではなく、かかわりをもつ他の技術や、それを取り巻く栽培環境（乾田化、病虫害・気象災害の発生など）をも含めた立地生態均衡系の変化と捉えられるべきである。

長年九州の稲に向き合い、そこで起きた品種改良、作期移動、施肥改善などの動きをつぶさに見てきた嵐さんの得た農業発展の原理である。同じように20年もの長きにわたって

奈良盆地に通い、大和農法の〈作りまわし〉を丹念に追いつづけた徳永さんの眼にも、もうひとつの立地生態均衡系の流れは明確にみえていたのだろう。

原田さん、嵐さんに加えてもう1人、私たちを近づけて下さった共通の恩人に京都大学の渡部忠世先生がいる。先生には嵐さんの紹介で知遇を得たが、そんな縁もあったからだろう。1995年10月に東京で、先生の農耕文化研究振興会と農文協が共催でシンポジウム「先人に学ぶ農業研究の道」を催したとき、ご指名で徳永さんは守田志郎を、私は嵐嘉一について報告した。

詳細は「農文研ブックレット No.11」(1996)にゆずるが、記憶にあるのは会議の冒頭で渡部先生が新渡戸稲造の「^{ちがた}地方学」に触れ、「徹底したフィールドワークを農学研究の出発点に」と呼びかけられたことである。あれから20年、徳永さんの今はこの渡部提言をひたすら生きた20年だろう。そして不出来な私はといえば、憧れつづけた20年かも。会議終了後の渡部先生・原田さんを含めてのイッパイは言わずもがな。

徳永農学への期待

ここからは徳永農法史を多少勉強した現在の私のコメントだが……

徳永さんは知る人ぞ知る、大の歴史小説マニアである。猛烈な読書力で、最近のメールでも同好の私に、飯嶋和一・朝井まかてなどの作品を、短評まで添えて紹介して下さい。そんな彼だから書けるのだろう。彼の論考は「野良着」どころか、洒落というか、京風というか。袴姿の肩を張った論考の多いこの世界を、いなせな浴衣姿で闊歩しているような爽快さがある。

先進的な科学技術が重用され、専門別・作目別縦割り研究が横行する近年のわが国農業研究では、営農に眼を向けた輪作体系・作業技術体系など、地道な研究は育ちにくい。これも明治以来の〈学理偏重・稲作独往〉農学が招いた負の遺産だが、その稲作独往にも陰りがみえはじめた今日、改めて土地利用型農業全体のあり方が見直さるべき時がきている。徳永さんの農法史研究は、私たちが今忘れようとしている〈農の水脈・心土〉を思い起こさせる貴重な足がかりになるに違いない。

徳永さんの今の望みは、亡き原田さんと約束したライフワーク『日本農学原論』を世に問うことだそうだが、私もその完成の日を首を長くして待っている。

(作物栽培・元農水省技術会議事務局長)

徳永氏と私

重久正次

私が「関西農業史研究会」に初めて参加したのは1987年であった。私は肥料会社員(1964～1999年)で、技術担当であった。職務上、3～4の農業技術系の学会に参加していたが、参加しても時流に乗りそうな思い付きの底の浅いテーマの研究や、当時の有名研究者の弟子によるお追従発表などが多く、若手研究者に失望していた。

そんな時に農文協の『日本農書全集』第I期刊行を機に結成された「農書を読む会」に参加し(1979年)、神戸大学の堀尾氏と出会い、その後も何回か会う機会を得、その時に

「関西農業史研究会」への参加を勧められた。しばらく逡巡していたが、今度は研究会の企画から会報誌の作成まですべて一人で行っていた徳永氏から、強く参加を求められた。文系のみならず理系の研究者も参加されており、いつも刺激に富んだ内容で、現在に至るまで研究会の末席をけがしている。かれこれ30年を越えるお付き合いとなった。

研究会は、それまで私が抱いていたぬるま湯につかっている研究者のイメージを完全に払拭するような激しく厳しいものであった。当時、三橋時雄・飯沼二郎・岡光夫の大先生が、若手の発表に手心を加えることなく容赦ない講評が加えられる。さらに研究会終了後の懇親会では、酒を飲みながら参加者同士のバトルが続く様な状態であった。いい加減な発表でこっぴどくき下ろされて、次回から姿を見せなくなる者も少なからずいた。当時若手研究者であった徳永氏も常にその厳しい洗礼を受け続けてきたが、それに耐え研究を続けられたからこそ、現在の高い評価を得ている研究者、後輩を導く教育者となり得たのだと思う。

私は会社のサービスの一環で農家の圃場に出向き、作物の生育診断や栽培のアドバイスすることによりかなりの時間を割いており、言わば企業版普及員のようなことをしていた。徳永氏から農業の現場を知りたいとの依頼を受けて、何か所もの現場を共に回った。1990年前後のことである。兵庫県の小野市や多可郡多可町の水稻栽培農家、奈良県五條市の野菜栽培農家などを巡り歩いた。

私と農家のやり取りを、徳永氏は田んぼのそばで忍耐強く黙って聞いているだけであった。私は、栽培技術には自然及び社会的環境や農家個々の事情によって様々であってよいと考えている。ある日徳永氏から、「一見すれば同じように見える上手に栽培されている作物でも、詳細に見れば農家によりそれぞれ姿が違うのですね」という言葉を聞いた時に、私が氏に伝えることはなくなったと感じたものである。

その後、徳永氏は広く日本中の農家を訪ね、奈良県の有機栽培農家との農談会を開き、果ては東南アジアから中国、韓国の農業を訪ねている。その間に数々の論文をはじめ多くの著作物をもっていることは、ご存知のことであろう。

(土壌肥科学・元肥料会社員)

徳永師と寺子屋・関西農業史研究会のこと

伏見元嘉

徳永光俊お師匠様とのご縁は、平成10年（1998）7月の暑い薄曇りの日に始まります。大阪経済大学の日本経済史研究所が主催された、第1回「寺子屋・史料が語る経済史」を受講させていただいた時です。そのため、勝手に徳永「師」と呼んでおります。

私事で恐縮なのですが、腰を痛めて退職を余儀なくされ、退屈しのぎに南伊予に伝わる軍記物『清良記』を読みふけていました。その中の農業の記述が多い「第七巻」が講演のテーマに含まれているようなので、傘を杖代わりに出席させていただきました。そこで『日本農書全集』第10巻（1980）所収の『清良記』の解題を書かれたのが徳永師であるこ

とを知りました。人混みが苦手なので、皆さんが退席された後でバツタリと徳永師とマンツーマンになったのが、直接お話した初めです。以来、毎年に行われる魅力あふれる講座に参加させていただき、一方的に束脩も納めない不逞の筆子・弟子を任じています。

徳永師は多彩な講師を招かれて、日本の経済や農業の歴史を主題としたものから、イングランドやアジアに、時代も近世から近現代へとどんどん広がって、視野を大きく広げていただきました。「鯨橋」の瑞光寺の本堂での文字どおりの「寺子屋」など、楽しい企画も混ぜて、受講者が楽しみの中で学べるように工夫され、ご自身も楽しまれていたように思います。

そして嵌まってしまった『清良記』を調べ遊びする中で、先行研究者として偉大な業績を残しておられる日本経済史研究所の創立者で、大阪経済大学初代学長になられた黒正巖氏の「農史」を紹介していただきました。戦前の歴史学界では日本史を「国史」と呼び、史料を以て立証することを積み重ねてきましたが、それでは史料を持たない・持ち得ない階層は取り残されることになります。これを正すために当時の京都帝大に「農史」という講座が生まれて、経済学者の黒正氏が担当して、大きな成果を挙げておられます。その学統で徳永師は学ばれて、「黒正学」といっても良いかも知れませんが、当事者になる農民の志向を汲み取った立場で研究を進めて、ご存知のように独特の農業史論を発表されています。

また徳永師が主宰されている「関西農業史研究会」にも参加させていただき、会員の皆様や例会報告者のゲストの方々との例会報告と、二次会での懇談で素朴な疑問にも研究分野の異なった方々に懇切に教わり、楽しく「老活」してきました。研究会で『清良記』とその周辺の史料・文献研究を何回か報告し、皆様から批判やコメントを頂きました。そして『中近世農業史の再解釈』（2011 思文閣出版）を出版できたことは、市井の老人にとって、この上もない喜びでした。徳永師には『社会経済史学』（第81巻1号 2015）で書評していただき、老夫婦そろって上新庄の日本料理店でお祝いまでしていただきました。

この会では飯沼二郎氏の警咳に接することをえたこと、書物だけでしか知らなかった岡光夫氏からお教えを受け、お葬式で見送りできたのも光栄なことです。岡氏は「農業史」を確立された東大の古島敏雄氏に学ばれました。近世の膨大な史料を発掘されてそれを丹念に分析して、古島氏の業績を継承しながら独自の境地を確立されたように感じています。徳永師は若かりし頃、岡邸に毎月のように通い、押しかけて論議を交わしていたとの事で、岡氏を通じて史料に立脚することを重視する農業史に触れて、「農史」と「農業史」と、やや異なった学統を共に学ぶ機会を持った、今日では稀有な研究者になられるようです。

学生委員長・経済学部長・学長など激務をこなされていた関係で、研究には時間が割けなかった時期が長くありましたが、これから研究三昧の日々が持てることになったことをお祝いいたします。

（農業史・元会社員）

徳永先生と農業従事者と、そして私たち

宮本敬子

たしか30年くらい前のこと、当時「ならコープ」で県内産直のあり方や大和の農業の歴史などの勉強会を企画しました。産直生産者のお一人で、完熟トマトの生産農家である大和郡山市治道（はるみち）の堀内金義さんと一緒に来て下さったのが先生でした。「健康に育った作物を食べると、人間も健康に生活できる」と言う生産者。「地元で採れた安全なものを食べたい」と言う消費者。そして「農作物までも品質の画一化が進んでいるが、本来は各地方の栽培方法も農作物の味も違っていった。そこに歴史がある」と語られる先生。

この集まりはやがて「やまと農談会」へと発展し、1993年から2011年まで18年間毎月1回の定例会を持つことになりました。先生はどんなに大学の仕事が多忙(?)な時も、資料を作成し、手弁当で来てくださいました。先生は午前中に大和郡山市の古文書学習会で講師をされてから、午後においでくださいました。私は家族にやまと農談会は「授業料のいらぬ大学」と話して、毎回参加していました。

やがて「やまと農談会」を母体にして、実際に生産と販売をする「やまと農業ネットワーク」(略称：YAN)を1996年1月に設立しました。約100世帯でそのうちの20世帯が生産者で、コメづくり体験、みそ部会、産直部会などを作りました。「グリーンボックス」を立ち上げて、月に1回ですが採れ採れ野菜、卵、果菜などを消費者に届けました。箱詰めにも消費者が加わって、「一緒に!!!」を合言葉に活動しました。

治道トマトは、1981年から堀内さんら生産者と私たちならコープが産直を始め、「ほんとうのトマトの味がします」、「子どもが喜んで食べます」と大好評でした。私も当時、理事として奔走しましたので、懐かしくうれしい思い出です。そのトマトだけでなく、キュウリ・マルナス・サトイモなど、奈良盆地の歴史と風土に根ざした作物も入れました。

先生からは、「経済的メリットを考える儲かる農業に傾きがちだが、でも本来の農産物は健康に役立つもの、単なる商品ではない。お母さんたちも、もっと頑張らんといけんのじゃ!!!」と、常に励まし(?)を受けました。何かしら熱くなると、先生は故郷の松山弁が混じってしまうようでした。そうしてならコープの組合員組織の中に、2004年1月から「いただきます」というグループを先生と一緒に作りました。いろいろな料理の提案をして調理し、みんなで「ごちそうさま」をしながら頂き、農業と食の大切さを学んでいきました。「学んで良かったと思ったら、周りの人に伝えて!」、「主婦にだって出来るよ、ちょっとだけ無理して、人の役に立つ喜びを味わいましょう!」と。

「やまと農談会」、「YAN」、「いただきます」を通して、生産者と消費者も変わっていききました。消費者も納得、かつ生産者の経営も成り立つ農業へと……。楽しかった思い出の一つに、YANのコメ部会が減反田で酒米の山田錦を栽培し、地元の酒造会社の協力でYANブランドの地酒を作ったことです。会員だけでは捌ききれず、酒税の問題で中止となり、ヒノヒカリ栽培に変えました。先生も田植えや稲刈りを一緒にやり、収穫祭では美

美味しい酒を飲み交わしましたね。

先生には大学の授業や校務、論文作成などで忙しいにもかかわらず、「農業現場」に足を運んで常に私たちに寄り添って、提案、ご指導をしてくださいました。私はこう思うのです。日々の暮らし方が運動です。自国の農を応援し続けます。生命の源ですから。農は文化です。残り少なくなった人生ですが、これからも先生から頂いた教えを伝えていきたいと思います。先生の熱い思いに、「感謝」です。

最後にもう一つ、先生に感謝の言葉をお伝えします。私の故郷である和歌山県橋本市の木版画家である巽好彦さんの作品を、大学のD館エントランスに展示してくださったことです。巽さんは大経大の卒業生ですが、母校への寄贈は夢のようだと感激されていました。こうした細やかな心遣いをありがたく思います。

(元ならコープ理事・主婦)

研究会の徳永先生：Son visage et sa voix (お顔とお声)

棚次正和

徳永先生とは、プロジェクト「いのち」という先生主宰の研究会で出会った。事務的な仕事は、渡邊勝之先生（当時、明治国際医療大学准教授）が取り仕切っていた。徳永先生のご専門は農学、渡邊先生は鍼灸学だから、学問上の接点はないが、安藤昌益の研究会でお知り合いになったようだ。2011年3月初めにご連絡をいただき、祇園白川筋の飲み屋でお二人とお会いました。徳永先生は大学からの帰りは、阪急河原町駅で電車を降りて、自転車でご自宅まで帰られていたので、確かその日も自転車に乗られ、バンカラ風の下駄履きであった。

酒が入ると、にこやかなお顔がさらに緩み、張りのあるお声も一段と弾んだ。故郷・松山（伊予）弁の抑揚のついた口調は、讃岐出身の小生には、同郷人に会っているような懐かしさを覚えた。松山は正岡子規や高浜虚子を生んだ俳句の町、奥様も俳号をお持ちとか。時折、小生が披露する俳句も、「プレバト」の夏井先生よろしく、快刀乱麻を断つ如くばっさり切られてやいないか些か心配である。

2010年1月から始められたプロジェクト「いのち」は、専門を問わず、広く「いのち」について考える研究会であった。医療従事者の参加者が多数を占めていたが、何の縁か小生にもお声がかかり、研究会でお話をする機会があり、ほぼ毎回参加させていただいた。既にその頃、小生にも人脈が広がっており、遺伝子工学の村上和雄先生、救急医療の矢作直樹先生、宗教学の町田宗鳳先生など、著名な方々にご講演をお願いした。

研究会での徳永先生の役割は、参加者の発言を一定の方向に指南するのではなく、通常はしばらく様子をご覧になってから発言される。場の空気を一旦和ませながら、平易な言葉で感想を述べられ、ついでに持論を少し開陳されるという具合であった。小難しくあれこれ語るのではなく、ざっくりと全体を掴んで、二つ三つのキーワードで総括するという

見事なやり方であった。大阪経済大学学長を3期務められた方だけに、バラバラに拡散しがちな議論の方向性をゆるやかに一つに纏め上げる手法は、学内の多様な意見を一つに集約する学長職の手法と同じだったのだろう。学長には強引なブルドーザー型と人格温厚な対立緩衝型の二つのタイプが典型的だが、徳永先生はそのいずれにも該当しないお人柄ゆえ、学長職8年半の間にはご苦労が絶えなかったに違いない。

徳永先生のご専門は日本農法史、日本農学原論である。一時期、小生の父親が自然農法を実践していたこともあって、自然農法についてお尋ねすると、必ずしも肯定的なご意見でなかったことは、やや心外であった。近著『日本農法の心土』（農文協、2019年）では、天然農法と人工農法の対立を止揚した「天工農法」を提唱され、日本農法の原理「まわし（循環）・ならし（平準）・合わせ（和合）」が再興された21世紀の農法革命（心土不二）を展望しておられる。生きた自然と生き物を扱う農学が物質を扱う自然科学に分類された学問的区分の齟齬は、「いのち」に目覚めた農学者には頭痛の種かもしれない。小生が関わる「宗教と科学の対話研究会」にもご参加くださり、農学を軸にして、宗教（哲学）へ、科学へと両翼を広げる努力を惜しまれない先生の姿勢は、大いに見習うべきであり、また読書量の多さには常々感服している。

歴史小説がお好きと伺った。青山文平の『白檜の樹の下で』には、江戸中期の武士が抱え込んだ葛藤、つまり侍の矜持とそれを挫く天下太平の世との狭間で悶えながら生きる姿が描かれている。その相剋の残影のようなものが、心なしか徳永先生の風貌や声音にも感じられる。ご自宅の書斎に伝統織物のネクタイが何十本か整然と吊るされている写真を拝見したことがある。武士の魂である「刀」が陰陽和合の剣の如く「ネクタイ」に変化した観があった。平成と令和という太平の世での先生のお顔とお声には、葛藤する武士の生き様が確かに投影されている。そう思うと、忍耐強く学長職を長期務め上げられた謎が、少し解けた気がする。ご退職後、第二の人生劇ではどのような武士の役を選ばれるだろうか。

（宗教哲学・京都府立医科大学名誉教授）

出会いと美術

高 谷 光 雄

それは2016年9月17日、京都市美術館でした。私の学生時代の恩師・三浦景生先生（^{みうらかげお}染色家）の遺作展が2週間開催されました。期間中、会場に詰めていました。美術館の係りの方から「鑑賞者の方から質問があるので、よろしく願います」と言ってこられました。

すぐに行ってみると、誠実そうな一人の中年の男性が待っておられました。三浦景生の作品について、「鑑賞に来たのは今日で2回目です。聞きたいことがあるので……」、というろいろな質問をされました。非常に熱心で、作者の三浦景生や、作品について次から次へと質問されました。質問の内容から三浦作品の魅力に惹かれて、感動されたので2回も見に来て下さったのだと思いました。30分前後お話をしましたが、閉館時間が迫ってきたの

で帰っていかれました。三浦先生がご存命でしたら、とても喜ばれたことでしょう。

いただいた名刺には「大阪経済大学学長」と書いてありました。後日、大学を検索して学長の「野風草だより」を知り、No.734「三浦景生の染め—白寿の軌跡」を読んで、三浦作品の魅力に惹かれて、感動された理由がわかりました。また、本来のご専門が農業史であることも知りました。

翌2017年に私の個展の案内を送りましたら、わざわざ寺町三条上がるの画廊に見に来てくださいました。有り難いことに、「野風草だより」に載せたいとの事で、また2回来てくださいました。季節が秋だったので、自転車に乗って下駄履きという、気さくな格好でのご来訪でした。

2年に1回のペースで個展をしていますので、昨年2019年も案内を送りました。この時は初めて一献傾けました。芸術、美術関係者以外の方と、芸術の話をする機会がありません。飲みながらでしたので、あまり記憶は定かではありませんが、作品の技法だけでなく、その価値・役割、創作姿勢などの話も交えながら、個展の感想、農学のことなども伺えました。いい刺激を受けてお酒が進んだのを覚えています。

「野風草だより」を読んでいますと、作品に対峙する姿勢は真摯で、感動した作品に出会うとその作家に対するリスペクトがあり、学者としての確かな見識で鑑賞されていることを感じました。知り合ってから、まだ短い期間ですが、気さくで、研究熱心で、文化・芸術に関心があり、興味のあることに時間を惜しまない、大らかな気風をお持ちだと思います。退職後は「美術評論家」として肩書きをふやし、二足のワラジを履かれてはどうか？いいと思います……。34年間ご苦勞様でした。

(染色家・京都精華大学名誉教授)

ご縁とおかげ

倉 貫 徹

徳永先生とのお付き合いは、2011年頃より大阪福島区や神戸、京都などのギャラリーでの私の個展に来ていただいてからです。私の母校・大阪経済大学の創立80周年（2012）には、D館エントランスに「W至円」を寄贈させていただきました。2013年の徳永先生の新入生特殊講義では、卒業生として「アートとは何か」を講演させていただきました。

最近の私の作品は、徳永先生がよく言われる言葉に直せば、石との「ご縁」から始まります。石との出会い、感じる石を探します。制作は石の意志との共同作業＝響存作業です。今回、徳永先生に買い上げていただき、D館エントランスに展示していただいた作品、「響存—高見観音」もそのようなことから出来上がりました。作品名は徳永先生の提案で、元学長で偉大な哲学者である鈴木亨先生の「響存哲学」からの命名です。

この作品は、2019年11月に奈良の御所市御所まちで開かれた展覧会で制作、発表しました。276×182×8cmの縦長の作品です。使われた石は奈良県東吉野村高見川の河原の石で、形や大きさが気に入る、石とともに制作したものです。徳永先生には一目見て「これ

は傑作ですね」と言っただき、展覧会中も今までのベスト作品だとか、いずれ美術館に入る作品だとか、欲しいけど大きすぎて買えないとか、高い評価をいただきました。

私個人の作品と言うより、石の意志と私の意識が、無意識の中で瞬間的に響存状態を引き起こし、生まれた作品だと思います。私の大好きな法隆寺の至宝である、9頭身の「百済観音」のすらりとした後ろ姿のように見えるのです。傑作は偶然生まれ、人がそれを傑作とするのかもしれませんが。

鈴木先生は私のゼミの先生であり、ご縁を感じます。「響存的世界」という哲学体系は、私の芸術作品の根本理念であるからです。ちなみに卒論のテーマは、「響存的芸術」でした。そこから私の芸術活動は出発しています。鈴木哲学との出会いが無ければ、今の私の作品は存在しないと思います。そして、ずっと軽い感性的なものになったはずです。鈴木先生の響存的世界、存在者逆接空の哲学体系は、究極の思想でもあります。本当に偉大な哲学者から教えを受けられたことに、感謝しています。

徳永先生の「おかげさま」の話やお母様の話を聞くと、私の父母が信心していた金光教の教祖の、神棚の額に入れられていた「おかげハ和賀心にあり」という言葉を思い出します。小さい頃からいつも見ていた「おかげは我が心にあり」というこの言葉は、私の体に染み込んでおり、私は不信心なのですが、幸せの究極の思想、生き方だと思います。おかげは万物のめぐみ、天地の循環であり、人はおかげを受けて生かされています。鈴木哲学の存在者逆接空、徳永先生のおかげさま、と通じるものを感じるのです。

以下は、私の作品に徳永先生が寄せてくださった解説文です。ありがたいことでした。

(アーティスト・本学卒業生)

作品のタイトル「響存」^{きょうぞん}は、作者・倉貫徹氏の学生時代のゼミの恩師であった第6代学長(1980~1986)・鈴木亨博士(1919~)の「響存哲学」に由来します。西田幾多郎の日本哲学を創造的に発展させた鈴木先生は、2019年めでたくも百寿を迎えられました。

「高見観音」は、奈良県東吉野村の清流高見川から採られた「宇宙の石の意志」が描きました。作者の愛する法隆寺・百済観音のお姿を髣髴^{ほうふつ}とさせます。「天地」—「自然」の石—「生物」^{いきもの}の作者による「響存」から、新たな「いのち」が「産霊」^{むすび}ます。

鈴木先生が言われる「響存」は「おたがいさま」^{いたわ}と労りあう、「存在者逆接空」の「空」は「おかげさま」と祈る、日本文化の「こころ」です。それは、初代学長(1949)・黒正巖^{くろしょう}博士(1895~1949)の教え「道理貫天地(道理は天地を貫く)」、「研学修道」と通じあいます。

2020年3月吉日

寄贈者 第13代学長(2010~2019)

徳 永 光 俊

徳永先生との思い出

竹澤健介

徳永先生は私にとっていつも気づきを与えて下さる存在です。先生との出会いは、私が大阪経済大学陸上部長距離コーチに就任が決まった時のことでした。ありがたいことに、先生から食事にお誘いいただき、大学近くの日本料理屋さんにて連れて行っていただきました。少し緊張しながらお店に向かいましたが、お会いして直ぐにユーモアたっぷりに話しかけてくださったおかげで、終始和やかで楽しい時間を過ごすことができました。

その会話の中で同席していた「野球部の山本監督やスケート部の上村コーチとともにスポーツで大阪経済大学を盛り上げてほしい」、そう力強く仰っていただいたことで、陸上部でのコーチングに対するモチベーションが高まりました。そのお言葉と同時に、「スポーツだけではなく、学業も重んじるように」とのアドバイスもいただきました。アスリートである以前に学生である。先生の教育にかける思いや大阪経済大学への愛を強く感じ、そのお言葉のおかげで、私のコーチングに携わる際の判断軸が明確になりました。また、同じ立場である山本監督や上村コーチとはこの食事会をきっかけに、部活の垣根を超えて交流させて頂いており、いつも刺激を貰っています。

先生は、以前から陸上部の大会に数多く足を運んでくださっており、私の就任1年目の2019年6月に開催された西京極での全日本大学駅伝の予選会にもお越しくださいました。全日本大学駅伝の出場権をかけて戦うこの大会では、残念ながら出場権を獲得することができず、大変悔しい結果に終わってしまいました。

その試合後のミーティングでは、「徳永先生を伊勢路に連れて行きたかった」と涙ながらに話す山口キャプテンの姿を見て、学長という立場にありながらも学生と近い距離におられ、本当に慕われていたのだなとあらためて感じました。先生は陸上部だけでなく他の部活動の大会にも応援に駆けつけておられ、大阪経済大学をクラブ活動で盛り上げるという言葉が体現しておられます。大変お忙しい中、分け隔てなくクラブの応援に駆けつける姿には感銘を受けました。

また、私が学内講演を行わせて頂いた際には、わざわざ時間を割いてお越し下さり、講演後にはお食事会の間まで設けてくださいました。人前で話すことに不慣れな私に対し、講演に対するフィードバックやアドバイスを熱心にしてくださいました。今では、先生にいただいたアドバイスの中にあつた「話の組み立て方」は、日々の学生との会話の中でも活用させていただいております。

以降、先生にはプライベートでも大変お世話になっております。他の若手の先生とともに、季節ごとに食事にお誘いいただき、京都の素敵なお店へ連れて行ってくださいます。夏は川床、秋は紅葉、冬は温かなハリハリ鍋…… 季節や歴史を重んじる先生らしいお店のチョイスで、季節の食材を楽しむ贅沢な時間を過ごしなが、大阪経済大学の歴史や教

育への熱い思いを学ばせていただいております。

前学長という立場でありながら、私のような、一クラブ活動のコーチをいつも気にかけてくださる先生には感謝の念に堪えません。先生にはいつも与えていただければかりなので、今年こそは恩返し。先生を全日本大学駅伝へ連れて行けるように学生と共に頑張りますね。先生、長い間、本当にお疲れ様でした。そしてこれからもよろしくお願いします。

(本学陸上部長距離コーチ・本学非常勤講師)

Ⅲ ゼミ卒業生たちの思い出

徳永先生との思い出

西尾 功

私と徳永先生とは、私が大学3年で徳永先生のゼミを選択して以来、約30年お付き合いをさせて頂いております。私は高校卒業後、専門学校を経て就職し、社会人となり、勉強の必要性を痛感し、会社を退職し、大学に入学しました。徳永先生と出会ったのが3年生のゼミだったので、私が26歳、徳永先生が37歳だったと思います。

ゼミの正確なテーマの名称は覚えていませんが、テーマは自分を探求するものだったと思います。就職活動の際に使う履歴書にゼミのテーマを書くと、面接官が必ず質問をしてくるようなテーマで、当時としては、かなり斬新なゼミテーマだったと記憶しています。先生の発想があまりにも斬新すぎたのか、ゼミでは淀川の河川敷でソフトボールやバーベキューをして楽しんだ記憶しか残っていません。ゼミ旅行は徳永先生が率先して企画に参加し、一番楽しんでいたように記憶しています。

私は大学卒業後、企業に就職し、技能職の採用を担当したのちに、労働組合の執行委員に就任しましたが、労働運動をアカデミックに研究したいと思い、徳永先生と相談しました。関西大学大学院経済学研究科博士前期課程に入学し、過労死問題や株主オンブスマン活動をしていた森岡孝二教授のもとで指導を受けることになりました。

徳永先生から「西尾君が、なぜ40歳にして勉強をしようと思ったのか、学生の前で話してくれないか」との依頼を受けました。学外講師として、徳永先生の講義の時間を割いて頂き、学生さんの前で、自らの経験や「勉強する意味」について話しました。

私は勉強が必要と思うと大学院に行く癖があり、その後、関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科を経て、経済学において前期課程で終わっていることが中途半端に思い、また徳永先生と相談しました。55歳で関西学院大学大学院経済学研究科博士後期課程の受験に挑み、入学致しました。社会人としては、30年の経験がありますので、仕事上の悩みなどを徳永先生に相談をすることは、あまりありませんが、大学院のこと、研究については、卒業して何十年たっても相談しています。

徳永先生が日本経済史研究所長のときに、家近良樹先生の幕末の講演や、上田閑照の西田哲学についての講演に参加させて頂きました。今でも不思議に思うのが、梅田で待ち合わせをし、顔を見るなり「地下鉄に乗る」と言われました。何も告げられず、大阪外大（現在の大阪大学）の少林寺拳法部との飲み会に先生と参加し、「少林寺拳法を盛り上げるにはどうしたらいいか」について議論したことです。私は小学校6年から高校1年まで少林寺拳法を習っていたので、少林寺拳法を盛り上げることについては賛成ですが、なぜ私が参加したのかが、今でも不明です。

これまで、頻繁に飲み連れて行ってもらっていただきましたので、徳永先生が定年退職すると、非常に寂しく思います。定年退職後は、年齢や環境にあった研究をされるだろうと思っています。徳永先生、いろいろとありがとうございました。お世話になりました。健康に留意し、セカンドライフを満喫してください。時々は飲みに行きましょう。

（徳永ゼミ第4期生・1990年度卒業）

徳永ゼミと出会って

福原正義

私は昭和57年の入学だが、家庭の事情、自身の病気などで3年間の休学ののち復学出来て、小学生の様に授業に通い、好きなバイクで神戸から大経大へ通う日もあった。多くの出会いに感謝して、卒論も提出できて25歳になっていたと思う。就職は、当時の就職部の方が親身になってくれ、自動車の販売会社に内定していた。徳永先生とは、日本経済史だったか、授業で出会っており、一緒に飲み誘っていただいたりしていた。卒業して社会人になるものと、私自身も家族も思っていた。

ところが次の年の4月、まだ大経大に通っていた。大教室で何かの試験を受けていて、試験監督をされていた徳永先生に声をかけられた。「卒業出来なかったん？終わったら話をきかせてみィ」。私は、正直みっともなかった。先生は、私がまだ大経大にいる理由を聞いてくれた。先生は、「夜間の学生を教えているから、そこのゼミへ遊びにおいで。みんな仕事しながらの社会人やから福原と歳の近い子もいるし。昼間の科目が少ないのだから」と誘ってくださった。

ゼミはみんな大人で、自分の研究のテーマを話していた。その時は、薄口醤油と濃口醤油はどの地方を境に分かれるのか等、各地の駅の立喰いうどんを食べに出掛けて調べていた。私は黙って聞いていることが多かったが、誰にも何故居るのか問われなかったので、ゼミに居続けることが出来た。時には外に出て、バーベキューやソフトボールにも誘ってくれた。平成に替わっていたが、自身の病気と付き合いながら8年がかりでやっと卒業出来た。

その後、老人ホームに就職し、神戸の震災時には、徳永先生からお金が届いた。職場で相談して使わせていただいた。震災から落ち着いた頃、将棋の谷川名人（当時）と高校の同級生だったことで、その後援会の集まりに先生も参加していただいた。

ここ10年くらいは、大経大近くの居酒屋で水曜日に、現役・卒業のゼミ生を交えて大人のお酒の飲み会に参加させていただいていた。そこで、当時のゼミ生だった西尾さんとの再会があった。水曜日での飲み会では、「一期一会」を勉強させて頂いた。それを、これまでの介護の仕事仲間を繋いでいくケアマネジャーの仕事に活かしてきたのだと思う。

あの時、徳永先生に試験監督で声をかけてもらえたおかげで、その後の人との出会いを大切に生きてこられたのだと思う。

(徳永ゼミ第4期准ゼミ生・1990年度卒業)

人生の授業の師

額 賀 潤 二

学生の頃の私は人付き合いが苦手で、人生できれば一人で静かに生きて行きたいと考えていました。社交的な人間になりたいと思いつつも、人と関わりを持つことを恐れ、そこから逃げていました。大経大に入学し、徳永ゼミの紹介文に心惹かれて研究室を訪ね、徳永先生と出会いました。狭い研究室では先生との距離が近く、何を話したらよいかも分からず、しばらく固まっていました。すると、徳永先生は教授の風格を隠し、商店街の理髪店のおじちゃんのような口調で気楽に接して下さり、私の緊張を和らげて下さいました。

徳永ゼミのテーマは、中古・廃棄バイクの行方について調査しようということで、フィールドワークが始まりました。中古バイク販売店、貿易関連会社、廃品回収業者に至るまで、関係のありそうな様々な業種の会社を訪問し社長の話を聞いて調査するという、私にとっては極めて難しい宿題でした。まずは会社に電話してアポイントメントを取るわけですが、携帯電話を握りしめ高鳴る胸の鼓動を聴きながら、数時間も通話ボタンを押せずに空を眺めていたことを思い出します。

なかなか調査に行けない私を徳永先生は笑顔で励まし、じっと見守って下さいました。そして何度も何度も挑戦することで次第に度胸が付き、電話応対から社長さんへのインタビューに至るまで、自然と楽しく出来るようになりました。

徳永ゼミで鍛えられたフィールドワークの神髄は、大学を卒業し社会に出た後も、私の人生の中で驚くほどの力を発揮しています。人との関わりを絶って生きて行こうと思っていた私自身を大きく変え、人と関わりを持つことによってこそ、人は生きている意味(生きがい)を見出して行くのだという事に気付かされました。

大学卒業後、自動車整備士として三年働いた後、職場恋愛で結婚した妻と共にキリスト教の宣教師としてタイ国の貧困地区で活動し、今年で10年になります。貧困地区に住む人々が経済的に自立し、心も身体も元気になって頂くことを目標に活動していますが、ここでも徳永ゼミで培ったことが大変活かされています。フィールドワークで現地の方々の家を訪問し、村人の文化や慣習を学びながら彼らと同じ釜の飯を食うことで、村人の「本音」を聞き、各地域で必要な援助とは何であるかを見極めることが出来るようになりました。

そして先生から教わった「そっと手を添え、じっと待つ」を実践しました。自分の思っ

ているようにやってしまうのは簡単ですが、それでは持続可能な村の自立には繋がりません。自分がやるのではなく、村人が自ら意識をもって行動を起こすことが出来るようになるまで、ただ励まして待つことがどれほど苦しく難しいかを知り、また待つて見守ることがいかに人や地域を育てるために重要であるかも、実際に経験することが出来ました。

三年に一度タイ国から日本に一時帰国する際には、徳永先生からのお誘いを妻と共に心待ちにしています。妻は徳永先生の大ファンになってしまい、食通の徳永先生と料理好きの妻が「食」について話し出すと、時間がいくらあっても足りません。2016年には京都「五山の送り火」にご招待下さいました。眺めの良い場所を確保し、今か今かと点火を待つ中、降り出した雨は次第に強くなりどしゃぶりに。先生が一番悔しそうに、「今度またリベンジだ!」、と送り火よりも燃えていたのが印象的でした。そして、帰国の際にはいつも宣教活動のための多額のカンパをして下さることに、感謝の念で一杯です。

いつまでも卒業生のことを思い、気にかけて、食事に誘って下さっては悩みを聞いて下さり、そっと手を添えて励まし、自らの頭で考える時間を与えて下さる徳永先生の人生の授業はまだ続いており、卒業してから今に至るまで、そしてこれからも私の恩師です。

先生がいつも口癖のように言われる、「道理は天地を貫く」と「おかげさま」の精神を忘れず、いつも何か、誰か、によって助けられて生きることが出来ていることに感謝を持って歩みます。徳永光俊先生との出会いによって培われた「こころざし」をしっかりと貫いて、邁進して行きたいと思います。

(徳永ゼミ第12期生・2000年度卒業)

徳永先生との思い出

佐田 文志

1 徳永先生との出会い

私は、2002年3月大阪経済大学経済学部卒業後に民間企業に4年間勤めた後、2007年4月に母校の大商学園高等学校の商業科の教員として着任し現在に至り、今年で14年目です。

私は中学校と高校でサッカー部に所属しており、高校2年生頃にサッカーで全国大会に出場できるような高校のサッカー部の顧問になりたいと思い、大学に行って教員免許を取得したいと考えていました。大阪経済大学を選んだ理由は、簿記検定を取得していたので有利な条件で受験できる事と、実家から通える距離にあったことです。当時は経済学部と経営学部を選ぶことができたのですが、偏差値が少し高い経済学部を選びました。その時に経営学部を選んでいれば、徳永先生とお会いすることはなかったかもしれません。

在学中の2年生のゼミから徳永先生のゼミで活動させていただきました。徳永先生のゼミを選んだ理由は、サッカーサークルの先輩が徳永先生のゼミ生だったからです。

2 学生時代の卒業論文

今回徳永先生の退職記念号に卒業生として執筆の依頼を受け、どのような原稿を書こうか考えていました。まず、最初にしたことが「日本の職人 2001年度 卒業論文 大阪経

済大学 徳永ゼミナール」を読み返すことでした。これは、2001年度の徳永ゼミの卒業生13名が職人（プロフェッショナル）の生き方を取材した卒業論文集です。表具師、京瓦師、住職、花屋、歯科医、教師、コンビニ店長、バイク自動車整備士等の様々の職種の第一線で活躍された方の、生い立ちから、苦勞話、考え方、その仕事を選んだ理由、仕事に対する姿勢を取材したものです。

卒業して18年経過しましたが、今回が一番熱心に読みました。当時の卒業論文を書いている頃を思い出しました。それと同時に各業界の活躍されている職人の考え方に触れることで、人生に悩んだ時、仕事に悩んだ時にヒントが得られる論文集だと思いました。徳永先生が私たちに課した卒業論文のテーマ「職人の生き方」は、他のゼミとは違い私たちは職人に直接会いに行きました。他のゼミ生は図書館に通っていました。私自身も教育実習でお世話になった高校の恩師を取材したのですが、当初は正直億劫に思っていました。

しかし、論文を書き上げる頃には、職人のプロフェッショナル魂、考え方、情熱、オーラ、仕事に対する姿勢を肌で感じることによって、学校の教科書からでは学べないものが私たちの心に響いてきました。先生が、なぜこのようなテーマを私たちに課したのか解りました。大学4年生の時期に職人に触れて学ぶことは、私たちが社会人として巣立つ前に非常に有意義でした。

3 卒業後の私

卒業後民間企業に勤めていた頃は四国に住んでいましたので、徳永先生とお会いする機会がありませんでした。2007年以降に現在の職場大商学園に勤めるようになってから、同じ教育業界という事もあり、以前より接点が増え一緒に食事へ行くこともありました。

5年程前に徳永先生と食事をしている際に、教員志望の徳永ゼミ生と一緒にいたので、そのゼミ生にアドバイスをしていました。それを聞いていた徳永先生が、「佐田君、随分成長したね。学生に話してあげてくれない」と頼まれて、新入生特殊講義などで学生に対して卒業生として講演することになりました。まだまだ半人前の私ですが、私なりの職人魂を学生たちに語りました。徳永先生が私のことを職人として認めてくれたのかなと、嬉しい気持ちになりました。この講演も2019年で5年目になります。

4 徳永先生の職人魂

徳永先生が学長をされている時は、様々な校務で多忙にされている様子が伺えました。その時に私が徳永先生に質問しました。「学長されているのですから、講義やゼミまでされる必要あるんですか？他の先生方に任せたりしないんですか？」。学長の答え「他の先生に任せる事は可能だし、そのほうが自分の時間もとれて楽になるけど、学生と触れる機会がなくなると教師としての感覚が鈍る。時代の変化が速い昨今では、3年・5年と現場から離れると感覚が鈍り、時代に取り残されて行く」、とおっしゃられていました。その時に「さすがだな」と思いました。

また、徳永先生が話されている言葉で印象に残っているのに、「おかげさま」・「人とのご縁」というのがあります。私も「おかげさま」を意識して使うようにしています。

(徳永ゼミ第13期生・2001年度卒業)

おかげさまの心

酒井康樹

徳永先生、ご退職おめでとうございます。長年にわたり大学でのご指導、本当にお疲れ様でした。今思えば大学近くの居酒屋で、先生に今後の進路について、ゼミ生の僕が泣きながら思いを打ち明けたあの日が懐かしいです……覚えていますでしょうか？（笑）あれが僕にとって学生生活での1番の思い出となっています。

大学を離れてからも、劇団の研究生時代に時折連絡をして下さり気にかけて頂いたこと、また舞台上に立てるようになってからはお忙しい中、わざわざ劇場まで何度も足を運んで下さったこと、本当に感謝しております。人と人とのつながりを大切にしている先生の姿勢に、また一つ学ばせて頂いた気がします。

まだまだ未熟な自分ですが、先生から何度も教えて頂いた「おかげさま」の気持ちを決して忘れずに、日々の稽古に励んでいきたいと思えます。

これからも変わらず健康で素敵な人生を歩まれますよう、お祈り申し上げます。

（徳永ゼミ第25期准ゼミ生・2008年度入学）

「おかげさま」

村田晶紀

「おかげさま」、徳永先生がよく口にしていた言葉です。徳永ゼミに入ってたくさんのことを学び、たくさん思い出ができました。卒業して4年経った今でも徳永先生やゼミ生との交流は続き、卒業してからも徳永ゼミに入って良かったなと思う瞬間が多々あります。

現在は社会人4年目、製薬会社のMR（医薬情報担当者）として働いています。この会社に入社したのも、徳永先生が繋ぎ合わせてくださったおかげだと思っています。「僕のゼミ生がその会社で働いているから、連絡とってあげるし、1度3人でご飯でも行こう」と声をかけてくださり、お食事の席を設けてくださいました。その席ではたくさんお話をお伺いすることができ、不安だった気持ちが一気になくなり、安心して就職することができました。今でも、徳永ゼミ卒業生であり現在同じ会社で働いている先輩方と徳永先生でお食事に行くこともあり、素敵なお縁をいただいたことを感謝しています。

在学中で、最も思い出深く学ぶことが多かったのは、ZEMI-1 グランプリです。出場56チーム中準優勝というすばらしい結果をいただくことができ、また日経BP主催の西日本インカレにも出場する機会をいただきました。この結果の裏には、たくさん学びがありました。他のゼミは団体で出場するのに対し、徳永ゼミでは個人での出場。地元の職人にフィールドワークを行い、「伝統と革新」をキーワードに、神髄に切り込んでいくというのがテーマであったため、アポイント取得から聞き取りまで全て一人で行いました。伝統を革新させながら現代まで受け継いできた堺の「注染」の社長にお話を伺い、社長の熱

い気持ちを感じ取った瞬間、私の中で何かが変わった気がします。社長にお話を伺うだけでなく、工場を見学させていただいたり、社員さんにお話を伺ったり、販売店舗に足を運び商品を手に取ったりと、活動範囲はどんどんと大きくなりました。

たくさんの気持ちを受け取り、気付いた時には伝えたいことがありすぎて、10分間のスライドに収まりきれない状態になっていました。夢の中でもセリフが呪文のように流れてくる日々、全てを投げ捨て ZEMI-1 グランプリだけに夢中になった時間でした。その期間、徳永先生から何度も何度もプレゼンのチェックを受け、たくさんの助言をいただきました。先生の助言がなければ、私の10分間のストーリーは出来あがっていなかったと思います。学生のうちにこのような経験ができたことはすごく大きな出来事であり、今の仕事にも活かされています。そして、そこまで夢中になれたのも、徳永先生をはじめ、ご協力くださった取材先の方々、家族の支え、友だちの応援があったからだ、終わった時には感謝の気持ちでいっぱいになりました。笑いあり、涙ありのすごく充実した時間でした。徳永先生と二人三脚で創り上げたものである分、ZEMI-1 グランプリで準優勝し、当時学長であった徳永先生から表彰状を頂いた時は、今まで感じたことのない気持ちになりました。

また、徳永ゼミではかけがえのない仲間がたくさんできました。タイプは驚くほどバラバラですが、お互いを認め合い、尊重し合える最高の仲間だと思っています。一瞬一瞬を本気で楽しみ、ぶつかり合う時は本気でぶつかり合い、高め合う時は本気で高め合える、そんな仲間ができたのも徳永ゼミのおかげです。今でも定期的に集まり、集まった時には学生時代の気持ちに戻ることができます。私にとっては一生の仲間だと思っています。感謝の気持ちもあり、2019年4月の徳永先生の学長退任お祝いに、徳永ゼミ同期生に集まってもらった時には、ほとんどの人が参加してくれ、そこでも徳永先生の人望の厚さを感じました。

徳永ゼミに入って得たものはたくさんあり、こんなに充実した学生生活になったのは、徳永ゼミのおかげだと心から思っています。またたくさんのご縁をくださった、機会をくださった、愛情をくださった徳永先生には本当に感謝しています。「おかげさま」で、今の私があると思います。

(徳永ゼミ第27期生・2015年度卒業)